

時 評

一貫教育

本 宮 肇

教育科学の進歩により、問題児発見のために種々の検査や治療の方法が発達してきた。

そして素質よりもむしろ環境の方が重要な分野をしめてきている。治療の方法の一つであるカウンセリングにしても人間性を信じて根気と忍耐をもって何重にもコンプレッ

クスした精神の解明と再建設にむかって助力し、また、その原因となった環境の改善にむかって努力しなければならない。随分と大変なことである。最近の教師はすべてこうしたカウンセリングマインドを持って生徒を指導しなければならず、かつての権威により「従がわせる」時代とは学校の様相がすっかりと違ったものになった。

現代教育のねらいが、かつての偏知的画一的、詰め込み主義、国策順応型から一変して全人主義、個性尊重、生徒中心主義となり、換言すれば一人一人の子供を全体としてこれからの社会に正しく適応できるように訓練、個性を尊重し、自主的態度を養い、進んで社会のひずみを正す平和の建設者となるような心身共に健全な人間を育てることなどは今さらいうまでもないが、さてこうしたカウンセリングマインドを持って身近な学園を含めて現実の社会を見る時に、さまざまな問題を見出すことができる。

学生たちが絶えずビラをくばり、はり紙をして学園の美観をそこね、集っては何か喧噪に訴え、勢よくデモして行く姿が中学の教室からいつもよく見える。中学の生徒会で一度このことが問題として取り上げられ、全生徒の意見が集められた。結論的にはビラを配る時はちらかさないよう芥箱を置いてほしいとか、スピーカーを中学の方に向けなくてくれといった平凡な申し入れすることに落着いたようだが、議論の過程において、中学生は大学生に対して不必要な対抗意識や劣等感を持たず、共存している兄貴分といった感情で大学生のこうした止むに止まれぬ活動に対して非常に適切な判断を下していたのは嬉しかった。

過日、学生が、たぶん、政府がオリンピック関連費として莫大なお金を使ったことをもじったのであろう「大国日本の饗宴」なるまことにアイロニクな催しが行なわれたようである。学生や生徒の感受性は新鮮で実に面白い。平和共存路線で世界の政局が先進国対後進国の問題へと大きく舞台を移してきたが、いわゆるカウンセリングマインドを持って眺める時こうした大国意識と後進の劣等感、焦燥感がイデオロギーの問題とならんで現代の問題となっていることを見出す。

さて先般、慶応義塾を訪問して知り得たことの一つに、塾内各校から委員を出して一貫教育委員会なるものがあるということである。一般の教育目標が全人主義とか生徒中心主義となってきた今日、かつての同志社教育の特色とされてきたものも、キリスト教主義という点を除けばほとんど一般の学校のそれとの差違はなくなっ

できたといえる。ただし、一般の学校は現実に受験というひずみがあるために教育の理想が生かされにくいということはできる。慶応は校祖の精神と私学教育の特色を生かすために小、中、高校、大学からなる一貫教育委員会なるものが設けられ、各立場の意見が充分に述べられ、尊重され、物心両面にわたる協力体制を作っている。今の同志社の教育的課題は何といつても一貫教育の体制を確立し、同志社教育の実を上げることだと私は思う。校祖立学の精神も福沢諭吉の民主的思想がすべての人の理性により理解できるのにくらべて、新島精神なるものが宗教的人格の深さから出発しているため、すべての人が共通の理解に達するということが困難であり、同志社の教職員も各自の人生観、世界観によりずいぶん様々な理解をしているようである。キリスト教徒は直覚的に新島精神の一端を理解しているような面もあるが、それが教育科学と結びつきにくいためなかなか一般化しない。こうした問題も、最近、中学の教育研究の中で問題ともなったが、とうてい一中学校だけでは適切に解決することとは困難であり、全学的に教育科学との関連において明確にしてほしい問題である。そしてその基礎に立った一貫教育のキャリアキュラムを全学的に建ててもらいたいものである。各校の自主性を尊重されるのは有難いが、何の連絡も協調もなく、進学の時にだけ何かごたごたする。これでは一貫教育は存在しないというのが正しい見方であらう。

中学、高校は生徒数の激減期を迎え、その存亡の試練をかけた時期にきているだけに、こうした問題も真剣にならざるを得ない。「大学が良くなれば中学、高校も自然に良くなる」という誤った、

または無責任な大学中心論があるように聞か、特色ある同志社教育はそこからは生れてこない。初等校より大学に至る周到な一貫教育によつてのみ校祖の精神を生かし、国家、社会の期待にそい得るものと思う。

「鉄は熱い中にうて」とあるごとく慶応は小学校からの一貫教育である。新島先生が望まれた宗教的人格の陶冶は低学年ほど有益である。

現在、学内諸学校の中には、協力ではなく自立、自衛のための冷（熱）戦すら存在するのは遺憾である。これも学内に一つのぶどうの樹としての血のかよった話し合の場がないことも反省しなければならぬ。中学は長年にわたり大学発展の圧力を受け、教育条件の犠牲を強いられてきたという実感を持っている。そして大國主義的大学の圧力のもとにはわれわれの理事会すら不信であるという意識は強い。生徒激減期における公立学校の整備の規準に遅れないためにも早急に対策が必要であり、新しい計画、新しい発展が必要である。他の学校も同じような問題を持っていることと思う。こうした際にこれらを全学的にとらえ、相互理解と協力の下に、暖かく力強く進めるために話し合う場ができることを強く望んでやまない。

（中学校教諭・社会）